書評

弘末雅士著『人喰いの社会史――カンニバリズムの語りと異文化共存』（山川出版社、二〇一四年）

林　みどり

なぜ人喰いの「歴史」ではなく「社会史」なのか。本書は、人が人を喰うことの「事実」それ自体についての歴史的探査を目的としているのではないからだ。そうではなくて、人が人を喰らうことについての語りが織りなしてきた歴史を探究するという、言説分析まで射程に入れた社会史を目指しているからである。

いうまでもなく、このふたつの歴史的アプローチは決定的に異なる。前者は、史料に記述されている出来事についての記述を、全面的にというのでなければかなりの程度「実際におこった出来事」の直接的な反映とみなしたうえで、そこに記述されていることがらの「事実」を積み上げていけば、史料の向こう側に存在し、記述者によって観察された過去の出来事そのものを把握することが可能であると考える。だが後者は実証派の前者とは異なり、そうした史料の明証性ないし透過性をア・プリオリとはしない。史料に書かれている出来事が現実には起こらなかった、というのではない。実際に起こったか、起こらなかったかの判断については宙づりにしたうえで、人喰いについて記述されたテクストが膨大な史料として現にわたしたちの前に積み上げられているという現実、揺らぐことのないこの目前の事実から出発するのである。

人を喰らう習俗や食人行為は、なぜこれほど大量に書き残されずにはおかなかったのか。しかも時代的に限定されているわけではない。また地域的に限定されるというのですらない。人喰い話は、古くは古代ギリシアのヘロドトスの昔から現代にいたるまで、広さにして地球上の陸地の四分の三を軽々と超すほどに広大な地域――すなわちユーラシア大陸西部からアフリカにかけて、さらには東南アジアから東アジア、極東アジア、オセアニア地域、ベーリング海峡をまたいで南北アメリカ大陸からカリブ海諸地域等々――において、またそれらの地域について、あたかも普遍的事実として倦まず語られ、記述されてきた。著者はその驚嘆すべき事実に着目し、なぜわたしたちは人喰い話に魅了

されてきたのかという、一見したところ単純素朴にみえる問いを発するところから本書を書き起こしているのである。

これほど広汎な時間的スパンと地理的広がりにおいて、食人行為ははたして現実にあまねく実践されてきたのか。人類の歴史は、それほどにも同じ種たるヒトを喰らうことへの欲望に貫かれてきたのか。そのように問いたくなる衝動を禁じつつ、著者は注意深くこう繰り返す。「食人慣行が史実かどうかは、慎重に検証されねばならないが、それが話題となったことは否定できない事実である。なぜ、そうした語りが広がり、今でも人喰い話に人は関心をもつのであろうか」（六頁）、と。

著者のこうした立ち位置には、一九七〇年代以降の歴史学や文化人類学における研究の広がりと深化が大きく影響している。直接的な影響をあたえた研究のひとつに、本書でもたびたび言及されている文化人類学者ウィリアム・アレンズの「人喰い神話」のテーゼがあげられよう。『人喰いの神話――人類学とカニバリズム』（一九七九年）のなかで、アレンズは、それまでなんら疑問視されてこなかった「未開世界」における人喰い表象の多くが、じつは記述者（＝ヨーロッパ人）による想像的なものであったとして、それまで何世紀にもわたって前提されてきた、「未開人（＝非ヨーロッパ人）は人を喰う」という文化的な他者表象の自明性を突き崩し、学界に大きな衝撃を与えた。とはいえ、アレンズの指摘の重要性は、しばしば極端なかたちで理解されるように、食人慣習が存在しなかったとする主張にあるのではない。食人慣習の有無はどうあれ、非ヨーロッパ人は、ヨーロッパ人によって「人を食う野蛮人」として表象されてきたこと。食人に関して数多ある史料の数々は、そのような文化的他者表象を構成するポストコロニアル言説の素材として生産・消費されてきたこと。そこにアレンズの議論の意義はあるのであり、また本書の問題関心の軸もそこに据えられている。

アレンズの研究が発表されたのとほぼ時を同じくして、ポストコロニアル批評の嚆矢となるエドワード・W・サイードの『オリエンタリズム』が上梓され（一九七八年）、西洋世界による非西洋世界についての言説からなる壮大な〈文書館（アルシーヴ）〉の形成と、その機能が明らかにされたのであった。その数年後には、思想家ツヴェタン・トドロフが、コロンブスの航海とはまさにその巨大な〈文書館〉の産物に他ならなかったと看破した。「彼（コロンブス）は新大陸を発見するのではない。それがあると彼が〈知っていた〉その場所に（アジアの東海岸が位置すると彼が前々から考えていたその場所に）見出すのである」、とトドロフは述べていた（*La Conquête de l'Amérique: la question de*

l'autre、邦題『他者の記号学——アメリカ大陸の征服』）。

同じ頃、文学批評家ピーター・ヒュームは、コロンブスの第一次航海日誌の記述を丹念に読み解き、子細な分析をつうじて、のちに聖典とされた航海日誌それ自体が、マルコ・ポーロの旅行記に全面的に依拠する「オリエントの言説」と「ヘロドトスの野蛮の言説」の奇妙な混紡からなるテクストに他ならないこと、そしてまさにその奇怪な織物において、「カニバル」（カニバリズムの語源）という言葉と「人喰いの野蛮人」という「意味」の結びつきが実現した点を明らかにした（*Colonial Encounters: Europe and the Native Caribbean, 1942-1797*、邦題『征服の修辞学——ヨーロッパとカリブ海先住民』）。

自らの直接的な経験や目の前の出来事の観察をつうじて、その場の出来事を「ありのまま」に記述したとされるテクストもまた、他のあらゆる知的生産物と同様、記述者の解釈格子を経ている。そうであるからには、見たまま、聞いたままのものがそこに写しとられているわけではない。テクストには、文化的他者について構築されてきた至大な知の〈文書館〉とのインターテクステュアルな引用・参照の痕跡や、政治的な権力関係、植民地主義的な関心、恐怖や親近といった情動的反応が紛れ込んでいるのであって、それを度外視してテクストを読むことなどできない。

周知のごとく、七〇年代以降、文化人類学と文学の領域を横断する学的営みとしてあらわれたこれら一連の研究は、歴史研究の骨組みを支える史料そのもののテクスト性を明らかにし、歴史学にも大きな影響を与えた。本書はそうした新しい歴史学の流れに棹さしながら、さらに一歩進んで、ともすると記述者側の表象権力の解析と暴露に終始しがちなテクスト分析からは距離をおき、独自の問いへと論を展開しているのである。

著者は、世界各地でヨーロッパ人やムスリム商人が残した夥しい数のテクストを渉猟し、記録が残された当時の状況を比較・検討する過程で、人喰い話がテクストに出現するには、ある一定の条件が存在することをつきとめている。これは驚くべき指摘ではないだろうか。

しばしば人喰い話に代表されるポストコロニアルな他者表象が俎上にあげられるときには、当時の状況や記述者と被記述者の関係といった具体的な歴史は捨象され、記述者と被記述者は、それぞれテクストを記述する超越的な表象主体と、テクスト内に取りこまれ囲い込まれる観察対象に抽象化されがちだ。だが著者は、そうした抽象的な二項対立からなる構造関係に還元する見方を拒否する。かわりに歴史的・社会的な文脈をテクスト分析に再導入し、記述主体と観察対象の関係や記述時の状況如何によって、人喰い

話はテクストに現れたり現れなかったりするといっているのである。

人喰い話がテクスト化されるには、どのような条件が必要なのか。著者の指摘をまとめておこう。まず第一のケースとして、記述者と直接的な関係が薄いか、ほとんどない現地人について、記述者による〈直接的〉な観察結果が記される場合がある。コロンブスやマゼラン航海に同行したアントニオ・ピガフェッタなどはこのケースに相当する。この場合、次のいくつかの条件のどれかがあてはまる時、現地人は「人喰い族」として表象されるという。①記述者が未知の対象と初めて接触している場合、②対象との接触に記述者側の経済的・政治的な利害関心が強く影響している場合、③ささいな顔の表情などから、対象に恐怖を抱いている場合、④対象との間に一定の均衡関係ないし関係性が成立している場合（平和時など）である。逆に、実際に相手と戦闘状態に入っている時や友好関係にある場合には、人喰い話はテクストに出てこない。裏を返せば、人喰い話は、記述対象との物理的・心理的距離が近くなりすぎると成立しない、特殊な他者表象ということになる。

第二のケースは、記述者による観察ではなく、現地人から得られた間接的な情報として人喰い話が記述される場合である。当然のことながら間接的情報を得るにあたっては、あらかじめ現地人との間に一定の友好的な相互関係が構築されていなければならないので、先のケースとはその点でも状況的に大きく異なる。またこの場合には「現地人」とひとくくりにするわけにはいかない。すでに記述者と現地人との接触の時間は長く、記述者にとっての文化的他者は、一方的に眼差されるだけの対象ではなくなっており、現地人の個別具体的な差異が記述者にとって重要になってくるからである。したがって「現地人」という括りの内部には、いくつもの集合体が異なるレベルの語り手として存在することになる。

たとえば現地の道案内人や水先案内人の場合である。案内人が語る人喰い話には、ふたつのケースがあるという。ひとつは、敵対する集団について語るに際して、しばしば敵側を食人集団として語っているというもの。もうひとつは、外来者を連れていきたくない場所について言及するに際して、そこは食人が慣習化している地域であるとの説明がなされるというもの。どちらの場合にも共通しているのは、外来者が慣例的なドクサ（定説化した臆見）として抱いている「人を喰う野蛮人」への恐怖を逆手にとって、案内人が自分たちに都合のいいように人喰い語りを流用している点である。つまり人喰い話は、絶大な武力と技術力をもって破竹の勢いで植民地の版図を拡大しつつあったヨー

ロッパに抗するための、数少ない「弱者の武器」（四六頁）になり得ていたというのである。

人喰いの語りを「弱者の武器」として用いていた例は、案内人に限らない。東南アジアでは、現地社会の中心的存在であった港市の支配者たちも、外来者とのやりとりに際して都合のいい仕方で人喰い話を利用した。彼らは外来者を前に、周縁地域における食人慣習をことさらに強調してみせることによって、外来者を重要な物産の産地から遠ざけるとともに、周縁地域との交易における仲介役として自分たちの存在意義を示そうとした。外来者と周縁地域を仲介する重要な要として自己表象するために、人喰い話を利用したのである。かくてヨーロッパの拡大とともに人喰い語りも拡大し、歴史記録に夥しい数の人喰い話が書き残されることになった。その後、港市支配層を介在させない直接交易がはじまるとともに、人喰い話は消えていく運命にあったというが、むべなるかなである。

外来者が抱いている他者イメージを領有し、自分たちに都合のいい言説に流用するという戦略的な語りの利用は、現地社会の周縁的諸集団についての他者表象として行使されただけではない。ときには古くから「人喰い族」として繰り返し言及され、表象されてきた集団自身が、自分たちを「人喰い」として自己表象した。配下に向けて戦闘を鼓舞する首長の演説に〈われわれ＝人喰い〉との言表がなされる場合などがそれだ。しかしこれにしても、よくよく読んでみると、どうやらその光景を記述しているヨーロッパ人に聞かせるための演劇性が伴われてのものであるらしい。〈演じられる野蛮〉という自己表象は、容赦ない植民地化の時代には現地住民が自らの存在価値を高めるために、またツーリズムが生き残り戦略となった現代においては、怪奇趣味と異国情緒に魅了される外来者を吸引するエキゾティシズムの餌床として、機能してきたのである。

記述＝表象の場にあっても実際の現場にあっても、圧倒的に非対称な関係におかれていたローカルな被記述者の、幾重にも媒介された「転記された言説」（G・ジュネット）のなかに、被記述者の抵抗の身ぶりの痕跡を読み解こうとする大胆な試み。本書のこうした視点は、顕在的な出来事のみによって構成される、単線的な植民地史像に対する異議申し立てとして、大きな魅力を有している。だがそれだけにとどまらない。ここにきてアレンズ的なパラダイムはっきりと退けられ、記述者による一方的な表象の力の行使の場としてのみテクストをとらえようとする、硬直した言説分析からは取りこぼされてしまう歴史表象のダイナミズムへと、あらためて視線が向けられるのである。

人喰い話は、交易網の発展と植民地拡大が輻輳する歴史

記録にあって、逸話として差し挟まれる歴史的余白などではない。外来者と現地民、征服・植民者と被植民者それぞれの語りを縫い合わせるうえで欠かせない緯糸の役目を果たしてきたのだ。現実にどうあろうと、誰によって語られようと、食人語りとは、語りのアドレッシングとなるべき対象＝記述主体が存在することによって、はじめて出現する語りなのだ。港市支配者や現地インフォーマントによる自己表象の場合などは、その典型的な事例といっていい。

また見逃せないのは、人喰い話は、記述者による表象の暴力が行使される場であると同時に、表象の暴力を受けている当の被記述者によって横領され、骨抜きにされ、錯乱がもたらされる場でもあったと示唆されている点である。たとえば内陸奥地のインフォーマントが、オランダ政庁の調査官を前に、「偉大なるカンニバリスト」として自己表象してみせた例などがそれだ。「食人者」という西洋的なレッテルを自ら模倣するインフォーマントの言表は、確かに著者が指摘しているように、植民地主義的言説に追従することで自己の存在意義を高めるという、プラグマティックな機能を果たしていただろう。だがはたしてそれだけだろうか。そこで明らかに誇張されたとおぼしき数字は、調査官による律儀な計算を誘発し、にわかには信じがたいグロテスクな「証拠」として記録にとどめられはしなかったか（一三三頁）。

後世の疑念を惹起させずにはおかない調査官の推定数値を記させたものこそは、ナルシシスティックな植民地言説に寄り添うべくして語られた現地インフォーマントの言表である。ここに被植民者による模倣の身ぶりが意図せずしてもたらす言説効果、すなわち被植民者が植民者の言説を模倣し、あたかも支配的言説に過剰に同化しようとする身ぶりが、逆に植民地主義的言説の内部に深刻な疑念やずれをもたらすとする、批評家ホミ・K・バーバの「模倣」の議論の好例を読み取ることはできないだろうか（*The Location of Culture*、邦題『文化の場所』）。

人はなぜ人喰い話が好きなのか。本質論にたってそれに応えることはできない。ただ、こと歴史語りとしてそれに応えるなら、圧倒的な力の不均衡にあって、それが「弱者」による「強者」との交渉のツールとして、抵抗の機会として、「弱者の武器」として機能してきたからである。本書のその指摘には、史料を生産してきた記述者たちの意図に抗って読むすべを学ばねばならないとする、歴史家カルロ・ギンズブルグの主張と響き合うものがある。あるいは人喰い話は、「歴史を逆なでに読む」ための里程標のひとつなのかもしれない。

（本学文学部教授）